

打場のドウドウ池と馬乗り池（下内神）

下内神には、平地もあれば、山もある。山といつてもわりとゆるやかな丘陵地で、ため池がいくつもある。その水を受けて、段々の棚田になつている。

なかでも「打場」と呼ばれるあたりの田んぼは、江戸時代に、五軒の農家が拓いたということや。お互いによく助けあつたのだから。みんな名字に田の字が付く。前田に後田、それに神田とかいうのや。

むかしはな、丘陵地全体に木や草が生えていて、鳥やけものがたくさんおつたらしい。だから、ちよつとした狩り場になつていたようだ。百姓仕事の合間に狩りをしたり、池にやってくる鳥を撃つたりしていた。そんなことから、このあたりを打場と呼ぶようになったということや。

ある時のこと、打場の狩り場のお殿さまの耳に入つたんや。すぐに家来が呼ばれた。

「打場という、よい狩り場があるらしいな。」

「はい。百姓が申すには、きじややまどり、ウサギやイノシシもおるようです。」

「よい狩り場のようだな。近いうちに出かけよう。」

「かしこまりました。」

家来が打場に下見にやつてきた。そして、五人組の組頭をしている五平の家を訪れた。

「お殿さまが、ここで狩りをしたいとおおせられていゝる。案内をしてくれないか。」

これは大変なことになつたと五平は思ったが、断ることはできない。ましてや、失礼のないようにしなければ……。

「承知いたしました。」

と言つて、五平は返事をした。

お休み所は五平の家となつた。下の池の横で馬をおり、五平の家に来ていただくことにした。その間、馬を上池の広場に連れて行つてつないでおくことに決まつた。

狩りの日がやつてきた。お殿さまが家来を二〇人ばかり連れておいでになつた。先に来ていた家来が下の池でお待ちしていた。

「殿、ここでおりにくたされ。」

「ドウドウ。ドウドウ。」

お殿さまがそう言つて、手綱を引くと、馬は止まつた。

そこで馬からおりて、五平の家に向かわれた。馬は家来にひかれて、上の池の広場につながれた。

五平の家ではお茶が用意され、しばらく休んでから狩りに出かけた。

雑木林の中には、すでに家来が持ち場についていた。木々がまばらで空き地になっているところへ、家来が獲物を追出す。待ち構えていたお殿さまと何人かが、飛び出してきた獲物を弓矢で射止めるというわけだ。

獲物がとれたかって？

そりゃあ、獲物はたくさん飛び出してきた。あとは腕次第だ。でも、収穫があったからこそ、次もまた来られるようになったんや。

来られるたびに、下の池で「ドウドウ」と言って馬を止められる。上の池で馬に乗られる。何回もお殿さまが来られたから、池に名前が付いた。下の池のことを「ドウドウ池」、上の池のことを「馬乗り池」と、呼ぶようになったんや。

今では「ドウドウ池」は「どんど池」に呼び名は変わったが、「馬乗り池」や「打場」はそのまま呼んでいるよ。

